

# 昭和戦前期のア列拗音エ列仮名表記

——横光利一・葉山嘉樹・井上友一郎の場合——

久保田 篤

一

助詞「は」「ば」が上接語末と融合する語連接上の音韻現象については、江戸語の特徴として多くの考察がなされているが、明治以降の調査も行われており、現在でも見られる現象である。その融合によって生じたア列拗音のうち、主にリャ・キヤの場合、通常の「リャ」「キヤ」ではなく「れや」「けや」のようにエ列仮名＋「や」とする表記が、大正・昭和戦前期を中心に比較的広く用いられていたことを別稿において述べた。「れや」「けや」等のエ列仮名表記が用いられるのは非融合の元の語（助詞の上接語）の末尾がエ列音の場合であってイ列音の場合は通常のイ列仮名表記になっている点や、「ては」「では」の場合はエ列仮名表記が行われず「ちや」「ぢや」である点などを指摘した<sup>②</sup>。

融合によって生じたリャ（リャー）/ɾja/（ɾjaŋ）のうち、非融合のときの助詞「は」「ば」上接語が、代名詞「あれ」「これ」「それ」等や、動詞・形容詞・助動詞の仮定形「すれ」「なけれ」等の場合は、「それや」「すれや」「なけれや」（拗長音になる場合は「それやあ」「そ

れやア」「すれやあ」「すれやア」等）などのように、通常のイ列仮名の拗音表記ではなく、エ列の仮名「れ」を用いた表記となっている。一方、上接語が、動詞の連用形「りり」や助詞「に」「より」等の場合は、「ありや（しない）」「にや」「よりや（いい）」などのように、イ列の仮名を用いた通常の拗音表記になっている。同じく、キヤでも、例えば、「聞けば」からのキキヤは「聞けや（いい）」、「聞きは」からのキキヤは「聞きや（しない）」という表記になるということである<sup>③</sup>。

また、上接語が「て」「で」の場合、すなわち「ては」「では」からのチャ・ジャは、元の語末がエ列音であるにもかかわらず、エ列仮名表記の「てや」「でや」ではなく、通常のイ列仮名表記「ちや」「ぢや」になっている。これは、テワ /tewa/ がチャ（チャー）/tja/（tjaŋ）に、デワ /dewa/ がジャ（ジャー）/zia/（ziaŋ）になる<sup>④</sup>。「けや」「れや」等からのキヤ・リャが融合後も同じ子音 /k/ /r/ であるとは異なり、子音が /n/ /p/ から /ŋ/ /m/ に変化してしまつたため、「て」「で」の仮名では表しにくいと意識されたのではないかと推測される。但し漢語の場合は、「蝶」の「てふ」、「糸」の「でう」のように、「て

「で」の仮名を用いて /cor//jor/ を表すことがあるから、和語と漢語では仮名の表音機能に関する意識が異なっていたか、あるいは「て」「で」が /c//n/ に対応し得ないというよりも「てや」「でや」という文字連続で拗音を表すことが歴史的仮名遣いに無いということが関わるか等が考えられる。「れや」「けや」も同様に歴史的仮名遣いに無いが。元「ては」「では」にエ列仮名表記が行われなかった点に関する追究は今回は措くが、これらがイ列仮名表記のみであることは、仮名の表音機能に関わる人々の意識が窺える興味深い特徴である。

いずれにしても、語連接上の音融合で生じたア列拗音の一部を、エ列仮名を使用して表記することが、大正・昭和期に比較的多く見られるという点は、特筆すべき特徴であると考えられる<sup>4)</sup>。そのア列拗音エ列仮名表記が用いられた部分として、佐藤春夫の作品集『蝗の大旅行』（大正一五年、改造社）における使用例全例を示しておく（用例や作品名等、漢字は全て新字体に直して示す（常用漢字表外の字は除くが）。ア列拗音の箇所には傍線を付すが、通常のイ列仮名表記には細線を、エ列仮名表記には太線を付す。括弧内の漢数字は頁数、アラビア数字は行数である。以下同。なお、この作品集については通常表記の箇所を全て示すことは省き、エ列仮名表記箇所として挙げた例のなかに通常表記があった場合その部分のみ細線を付した）。この『蝗の大旅行』は、「はしがき」に「年の幼い人に読んで貰いたいと思ふものを集めて」とあるものであり、このような子供向けの本においても、エ列仮名表記が使用されていたことも分かる。

いや喪服なんだ。あれや——（『月光異聞』六八四）

——あれやあ、本当の天狗さまじやらう（『魔のもの』一〇四一）

金いろの魚かと思つたら、これや、やつぱりあたりまへの黒光りの奴であつたか（『最もよき夕』三二一〇）

これや、この魚ではなかつたかしら。それちやこれは（『三三三』八）

おや、これやまつくらだ——（『月光異聞』六八四）

今でも泣いて話すが、これや愚痴とは言へまい……

（『魔のもの』一〇六一）

これや、私もちやんと見たのちや（『一〇八四』）

これや、天皇陛下さまちやらうか

（『私の父が狸と格闘をした話』一六〇一〇）

や。これや大変だ（『一五二一三』）

それや腐つてゐる（『実さんの胡弓』一五二一）

外からこつそりのぞいてみれや、あちらだつて油断してゐるしさ

（『月光異聞』六〇一〇）

やつぱりそれを見た子供は死ななけやならないともいふ

（『たからもの』二〇九五）

このように、「あれは」「これは」「それは」が変化したアリヤ・ソリヤ・コリヤや、「見れば」の変化したミリヤの場合に、「くれや」が用いられている。また「なければ」から変化したナキヤの場合には、右の最後の例のように、「くれや」が用いられている（なお、「夜は魔のものといふが、そりや、えらいものじや」（『魔のもの』一〇四八）

と「今すぐあの男に会はなきやー!」(『美しい町』二七一11)という通常のイ列仮名表記「そりや」「なきや」各1例も見られた。「では」の変化したジャや助動詞ジャは全て「ぢや」で、通常のイ列仮名表記である)。

右の佐藤春夫は大正期の最初の作品からエ列仮名表記を行っているのであるが、初めは主に通常の「りや」「きや」等を用い後にエ列仮名表記になるということもあり、同一人物の作品でも使用実態は実様々である。そこで今回は、そのような、途中から主にエ列仮名表記となった作家を取り上げ、昭和戦前期のア列拗音表記の実態を、同じ作家の複数の単行本を対象にして探ることにしたい。<sup>5)</sup>音融合に関わるア列拗音のうち、エ列仮名表記が用いられる可能性のある部分(非融合の元の語の末尾がエ列音で、「ては」「では」からのチャ・ジャ以外のもの)を主に用例として示し、そうでないもの(元の語末イ列音のもの)は全てイ列仮名表記なので時々確認のため適宜示す(融合に関わらないア列拗音も全てイ列仮名表記であり、挙例は適宜示す程度とする。イラツシャル、助動詞ジャ、くチャウ、チャント等)。

## 二

まず横光利一の本の表記を見る。

最初の作品集である大正一三年の『日輪』(春陽堂、文藝春秋叢書

2)収録の四作品のうち、アリヤ・ソリヤ等が見られるものとして、『敵』がある。次のように通常のイ列仮名表記である。

あなた、ありや、小学校の二年よりいつてあませんよ(一二七一)  
ありや、待てよ、二十八の年やで、十五年目や(二四一九)  
そりや淋しいのう(一四一八)  
そりや、俺の帽子や(一四三一)

念のため、他のア列拗音表記例も示しておく。

雇員さまぢや(一三二13) どうぢや、見やがれ(一三二15)  
助動詞ジャ「ぢや」他に(一三二15)(一三三二・14)  
(一三四二・2・8・13)(一三五三・5)(一三六10)(一三八一)  
(一三九1等6例)(一四二五・5)

あなたにや、そんな服は勿体ないわ(一三四14)

同じく大正一三年の作品集『御身』(金星堂)では、以下のように、僅かにエ列仮名表記が見られるものの、基本的にイ列仮名表記であった。後になっても常にイ列仮名表記の部分は、次に示すとおりやはりイ列仮名表記である。

助動詞ジャ「ぢや」『蠅』(一四二八)(一四三13・13)  
(一四四六・8・11)(一四五八・12)  
(一四六五)(一四七六・7・7)(一四八14)  
『村の活動』(一七八9)(一七九2・4)  
『落された恩人』(二二〇1)  
『芋と指環』(二二九3)  
『マルクスの審判』(二八〇2)  
『食はされたもの』(四〇〇2)

『男と女と男』(四四〇七)

デワ↓ジャ「ぢや」『月夜』(二五五10)(一六一七)

『穴』(一九六三・14)(一九七一・3)

『マルクスの審判』(二八〇二)

ニワ↓ニヤ「にや」『蠅』それまでにや死にますやろな(二四八12)

シワ↓シヤ「しや」『芋と指環』私わやもう知らん(二三四6)

云はしやつたがの(『蠅』一四八3)

いらつしやつた(『月夜』一五九11)

消しちやつたの(『月夜』一五九8)

難儀しちやつたの(『穴』一九八9)

仰おつちや言れば(『マルクスの審判』二六七6)

次の部分もイ列仮名表記である。

ネバ↓ニヤ「にや」『落された恩人』攫さらまにやあかん(二〇三12)

『男と女と男』雨あめが降ふらにや結構(四三一3)

後にエ列仮名表記となる部分も、以下のように殆どイ列仮名表記で

ある。

ソリヤ 『蠅』そりやいかん(二四八2)

そりや正午や(二四八11)

『月夜』この人つてばそりや変なの(一六五1)

『村の活動』そりや爺おややわ(一八四10) 他に(一八六2)

『穴』そりや搜たづねしたのよ(一八八3)

『落された恩人』そりや両手りょうてで攫さらまにや(二〇三12)

『芋と指環』そりや忙いそしがつております(二二14)

『マルクスの審判』、そりや、さうでは(二五九5)

他に(二六六7)(二六七6)

『敵』そりや淋しみしいのう(三〇八1)

そりや、俺おれの帽子ぼうしや(三〇九8)

『食たはされたもの』そりや御馳走ごちそうやな(四一〇3)

そりや通とつた(四二二2)

『男と女と男』そりやをるさ(四二六12)

そりや反対はんたいや(四三二6)

他に(四四〇7)(四四八5)(四五〇8)

コリヤ 『蠅』こりやツ、こりやツ。」と叫こんで(二四六11)

他に(二四七1)

『落された恩人』こりやどうぢや(二一〇1)

『芋と指環』こりやどうぢや(二二九3)

他に(二三八1)

『マルクスの審判』こりや俺おれの罪つとぢやないぞ(二八〇2)

『食たはされたもの』こりや上あ天気あぢやぞ(四〇〇2)

他に(四一五3)(四一八13)(四二〇7)

『男と女と男』(四三二3)(四五三1)(四五九2)

アリヤ 『芋と指環』ありやツ。(二二四9)

『男と女と男』ありやどこの牛うしかいな(四四五1)

レバ↓リヤ「りや」『男と女と男』

ほしけりや後で取つて来てやるか(四三二・12)

鼠が<sup>出</sup>りや、<sup>飛</sup>び上つてくるくせになア(四三三・14)

くやしけりや、泣けツ(四四一・4)

それでも<sup>良</sup>けりや、俺も<sup>良</sup>えわ(四五四・10)

口惜しけりや、かかつて来い(四五六・6)

このように基本的に「そりや」「こりや」「ありや」であるが、それぞ

れ1例ずつエ列仮名表記が見られた。

アアさう為なはれ、そりやえ、(『村の活動』一八四・12)

「こりやツ、これやツ。」と叫んで、地を打つた(『蠅』一四七・1)

あれや貨物や(『食はされたもの』三九八・14)

昭和二年の『春は馬車に乗つて』(改造社)所収の『春は馬車に乗

つて』のア列拗音は、次のように全て通常のイ列仮名表記である。

デワ↓ジャ「ぢや」雨の降つてゐる所ぢやなくちや(四〇・10)

他に(九九・9)(一一一・12)(一一三・3・6)(一二三・12)

(二五・11)(二九・5)

いま嗚鳴つちや。(一二三・8) 動いちや。(一六七・7)

ちやんと(一七九・9) はしやがれる(一七・10)

そりや考へることは考へるわ(二三・3)

そりや、あたし、あなたを大切にして(四五・5)

そりやいやだ(八七・7) そりやさうですわ(一一一・6)

そりや分つてゐるわ(一一八・11)

昭和五年の『高架線』(新潮社)所収の『高架線』も全て通常の表

記である。

助動詞ジャ「ぢや」いやな奴ちや、あ奴は魔物ちや(七九・9)

他に(一一三・12)

デワ↓ジャ「ぢや」まだちやねえか(四一一・15)

他に(八四)(一一一・13)(一一三・3)(一六四)(一一八・7)

テワ↓チャ「ちや」こりや、今夜でなくちや(一一八・10)

ニワ↓ニヤ「にや」首にや、ならねえぞ(八一〇)

おツ、こりや。(八一三) こりや、放せ、放せ(一一一四)

他に(一一三・9)(一一八・10)

レバ↓リヤ「りや」あれが出来りや、お前も俺も(七一四)

線が出来りや、お前も俺もおけら(八四)

今頃ありや、俺だつてとつちまアな(一一一四)

昭和六年の作品集『機械』(白水社)収録の『眼に見えた虱』も全

てイ列仮名表記である。

デワ↓ジャ「ぢや」駄目ちやないの(一一八・二六)

ぢや、今はどうだ(一一八・九六)

他に(一一八・四九)(一九〇・四・八・一一・12)

(一九一・八・九・11)(一九二・七・九)(一九三・二)

(一九四・11)(一九九・11)(二〇〇・12)(二〇一・1)

(二〇五・2)(二〇七・3)(二〇八・5)(二一一・11)

(二一九・3)(二二二・1・3・4)

テワ↓チャ「ちや」驚いちや 駄目よ(一一八・二五)

しなくちやならないわ (二二八七) 他に(一九二七・11)

みらつしやる (一九七10) (一八四八) (一九〇二)

いらつしやる (二〇〇4)

くてらつしやる (二〇〇5) (二二一八)

くしちやつた (二〇八七)

そりやさうね (二八五七) うむ、そりや、さうだ (一八五九)

ええ、そりやね (一八九5)

そりや、さう云ふ理窟になつて来るのね (一九〇12)

そりや、あたしは汚くつてもう駄目よ (二〇〇5)

他に (二〇〇9) (二〇九8)

昭和七年の『上海』(改造社) もまだイ列仮名表記である。最初の方の例を、「ぢや」「ぢや」も含め示してみる。

デワ↓ジャ「ぢや」ぢや、駄目ね (五6)

さう急い(い)だことぢやなし (二〇3)

これぢや息(い)がつまつて (一一七)

こ(こ)ぢや誰(だ)だつて (一一八)

他に (二〇2) (二二10) (二二三5)

テワ↓チャ「ぢや」ここで逢(あ)はなくぢや。(五5)

他に (二〇1) (一一9)

そりや、困(こ)つたの (四11)

そりや、あたしとあなたは人柄(ひとがら)が違(ちが)つてゐるわ (二〇11)

そりや、借金(しんきん)があるからさ (二二三3)

マダムが僕の傍(そば)にゐて下さりや、さう急(い)いで妻君(さいくん)なんか(一〇3)  
いやよ、行(い)かないつて仰言(おっしゃ)らなけりや。(一一6)

なお、「や」ではなく「あ」を用いた箇所もあった。

あたしに相談(さうだん)なさらなき(い)けな(い)ことよ (二〇9)

同じく昭和七年の『雅歌』(書物展望社) もイ列仮名表記である。

初めの方の例を挙げる。

そりやさうだ (四10) そりや、つまらん (六13)

そりや君の意志だ (八6)

そりや、いま全盛ですよ (一一6)

そりや、あなたなんか大丈夫な(い)かた (一一12)

こりやまた張り合ひのないもんでね (四10)

いつたいこりや、どつちを助けてやるべきかな (八4)

ありや危(あ)い (七8)

おかしけりや、誰だつて笑はうさ (二六14)

同じく昭和七年の『寢園』(中央公論社) は一〇〇頁あたりまでの

用例を挙げる。次のように、イ列仮名表記のほうが多いが、

今夜ぢや、そりや駄目よ (二三7)

そりやお待ちしてたの (一四2)

そりや達者は達者だけど (二四6)

そりや、あなたとあたしとは (一六3)

そりや、あたしなんか (六五8)

だつて、そりや、高さんだつて無理よ (七六10)

そりや全く気の毒は気の毒ですが（七九二）

そりや、勿論、僕ですよ（八七二）

そりやね、此の頃の経済学者は（八三〇）

そりや、大物ぢやないですか（九一二）

そりや駄目だわ（九六三）

そりや、あなたはあたしの云ふのは（九六九）

しかし、そりや、奥さんより困るのは、僕ですよ（九六二）

そりやまた、どういふことだ（一一四二）

そりや今日は何んだとか蚊だとか（一一九二）

そりや仰言つたは仰言つてだけど（一二一一）

こりや、駄目かな（二〇七）

あなたは好意をお持ちにならなけりや（三二二）

考へてなきやならないのよ（九七六）

以下のようなエ列仮名表記もある程度見られるようになって注目される。

そりやもう、わがままだ（七七一）

そりやもう、あんな有難い御亭主さんつて（七九五）

いつたい、そりや、どういふ御料簡なんですか（九四一〇）

そりやまたひどく新しくなつたんだね（一一一一）

この霧ぢや、まるでこれや、雨みたいだな（五五）

これや僕は、今日は奥さんに叱られに來たやうなもの（九七七）

話させていただけれや、これに越したこたアない（九九四）

利子歩合を低くしなけれやいかん（六〇三）

鬭争しなけれやならんからつて（八三〇）

そんなにあつちへいきたけれや、いらつしやい（一二一四）

昭和八年の『花花』（書物展望社）は再び基本イ列仮名表記となっ

ている。

そりや仕方がないわ（八一五） そりや問題外よ（一五九）

そりやね、あなたのことをいふと（三三二）

そりやしたいさ（六〇一五）

そりや、あたしや農民は好きは好きさ（九〇二）

何んだそりや（一〇一三）

今頃子供が出來たとしちや、こりやたまらんからね（二二一七）

またこりやひどい目にあひますね（五二一五）

子供が出來なけりや、勿論、結婚はしないんだろ（二二一八）

ぢや、結婚もしなけりやならぬし（二二三一五）

そんなでなけりや何も好んでこんなこと（二二三一四）

またこの作品では、ナキヤ（↑「なければ」）が、

そいでなきア、結局どちらだつて不孝なんですからね（九二）

出して下さらなきア困るわよ（八五一五）

などのように「なきア」でも書かれることがある（通常の「なきや」も、「そいつは産んでみなきや分らんね」（二二四一四）等のように見られるが）。

昭和九年の『紋章』（改造社）ではエ列仮名表記になっている（別

稿に「それや」の例を少し示した。

同じ昭和九年『時計』(創元社)も基本はイ列仮名表記である。幾つか例を示す。

それや、おかしかったのよ (二六11)

それや認めるけど (四〇10)

それや、あなたみたいな方の前で、お話するんなら (四一10)

それや、あたしにだつて分りましてよ (四四11)

それや、僕は知りませんけど (四九11)

これや、よほど俺もどうかしてゐる (七12)

これやたいへんだと思つて (二七3)

これやすまんことをした (三四6)

おや、これや、いけね、ないぞ (五〇7)

これやまだ僕のいたらぬところですが (四二10)

これや、病気でせうかね (五五3)

これさへあれや、もう大丈夫だ (五四5)

僕がついてれや、いいぢやないですか (四八11)

貯蓄をしないとやる愛情がなければ、世の中は健全にはいきませ

んからね (四六3)

イ列仮名表記のコリヤも少しある。

こりや、いけね。(五四8)

なお、念のため、このほかのイ列仮名表記例も、ある程度示しておく。

それぢや、言つた (八9)

ぢや、もう帰つたんかしら (一八8)

見えてるんぢやないわ (一九3)

他に「ぢや」(二八12) (一九9) (三三7) (三二10) 他32例

およりしなくぢやなんなのよ (二〇1)

変つちやみませんよ (三九3)

さア、まア、いつばい、召し上がつちや。(三七6)

他に「ちや」(四一4) (四三8) (四四2・7) 他5例

そんなことをした日にや、またあなたのご主人に (四三11)

よせちやつて (二七4) ぶつ倒れつちやつた (二八8)

忘れちやつた (三五9) なつちやいました (三六10)

させちやふ (四一2) 帰つちやつた (五一6) 他1例

てらつしやる (一八12) (一九6) (一九6) (三三10)

みらつしやる (二三1) (三四1) (四一11)

みらつしやいまして (二五6) 仰つしやいよ (二六11)

仰つしやいつてば (二七12)

ナキヤもイ列仮名表記である。

お酒でも飲まなきや、淋しくつてやりきれなく (三六10)

不孝にならなきやならない (四五4)

このナキヤには、『花花』と同じく「なきア」の例もある。

ちよつとぐらゐお上りにならなきア。(三六79)

さうでもしなきア、ほんとに病氣してしまふ (三六11)

御免して下さらなきアいけないことよ (三七1)

昭和一〇年『天使』（創元社）も極めて多くの用例が見られるので、ある程度の数だけ挙げておく。

それや、貞子さんをあなた、知らないからよ（二五11）

それや、貞子といふ人を見なければや、何とも云はれませんか（二六8）

しかし、それや、難しいことだが（三五13）

それや、君も困るだらう（二五四9）

それや、きつとさうでせう（二八八5）

あの方、それや親切ない人だわ（二九八1）

これや、もうすぐ、賛美歌が始まるな（二九10）

困つたね、これや。（二七一3）

これや、今度の旅は苦しみに来たやうなものだ（三二九10）

向ふに見えるのは、あれや大島だらう（一一二9）

帰つて良ければや、帰るよ（一五1）

苦しければや、苦しいと云ふのが、僕の性分なので（三八八1）

愛してゐないのに結婚しなければやならぬと云つて（三七13）

そんなことしなければやいいでせう（七五3）

次の御病人さんのお世話しなければや、いけませんのよ（七五2）

さうでなければや、僕はやりきれませんからね（三〇五2）

無理をしなければや、あの親父は（三三八2）

どうしても結婚しなければや、いけないと思つてゐた（三八七6）

帰りたければや、やむを得まい（三六三1）

〔結婚したけりや〕（二八〇2）もある

例外も「家内がゐなけりや、いいでせう」（八〇11）・「しなけりやな

らぬやうなら」（二八六9）など少しある。更に変化したナキヤは、

なるのだけ逃げなきや、つまらないよ（四九12）

耳が垂れなきや、どこかへやつてしまふつて（二七六5）

毎日一ぺんは考へなきやいけないよ（三〇〇1）

させておかなきや（三〇五11）

もう帰らなきや、いけないわ（三五九7）

このように通常のイ列仮名表記である。

昭和一三年の『春園』（創元社）も専らエ列仮名表記になっている。

ある程度の例を挙げておく。

それや困るよ（三11）

いや、それや、僕はそれでもいいが（三12）

いや、それや、喧しいほどのことはありませんよ（九2）

それや、どつか人間の修養が足りないんだよ（一九13）

しかし、それや、裂かれるところが君にあつたんだよ（二二2）

それや、困るけど（三四10） それや、十分さうだ（六六6）

ええ、それやいい方（七一9）

それや、見たいとは思ふけれど（七三4）

いや、それや間違ひだな（七四5）

それや、安心だよ（一〇五8）

これや、困ることになつた（四〇2）

これや、夜は駄目だね（八五11）

まアこんな失敗は、当分はしなけれやならぬ(五八二)

ナキヤは『時計』『天使』と同じくイ列仮名表記である。

また別の土地を買はなきやならなくなりますからね(九五)

も少し涙を飲まなきや、夫人の価値がないぢやないか(一九二)

安藤先生のところへ行かなきや、いけないんですもの(二二二)

も少し考へる暇を与へなきや。(五三二)

このナキヤには、『花花』と同じく「なきア」もあつた。

勝手元に這入らなきアならんだ(八五七)

なお、呼びかけ語的なコリヤはイ列仮名表記になっている。

「こりや。」と叫んで足をはだかつた(九七)

昭和一五年の『秘色』(新声閣)収録の、表題作『秘色』にも、エ列仮名表記があるが、

それやね、あなたのお神さんとは違ひますからね(五四一)

これや正義ぢや(七二)

この作品でも、呼びかけ語コリヤコリヤは、イ列仮名表記である。

こりやこりや。いたづらやめろ。

「これ」+「は」であるという意識の強弱が表記に表れているか。

昭和一五年『旅愁』第一篇(改造社)も多くの用例があるため詳しく示すことは省くが、ソリヤ・コリヤが、「それや、惜しい」「それや、さうだと」「危ないもんだねそれや。」「これや、どうです」「これや残念だな」のようにエ列仮名表記になっている。

同じく昭和一五年『考へる葦 横光利一集』(創元社)でも、最初

の小説『王宮』の例や、

きつとそれや、ギリシヤの王妃は(二三九)

つまり、それや、良い方へゆく方が良いといふ意味で(二四二)

次の『由良之助』の例や、

いや、それや、さうだ(四〇一)

それやもう定つてることだから(四〇九)

それや、君の知性に欠陥があるからさ(四九四)

いや、それや違ふ(五三七)

何といふそれや心ぢや(五三二)

それや、どういふことだ(五五四)

それや、こつちは有難いですけれども(六七三)

落第ですか、これや。(三九一)

もし戦死すれや、どんなに気持がいいかと思ふんです(六七九)

次の『シルクハット』の例など、

これや何んだい(八二二)

該当する例は全てエ列仮名表記になっている。

昭和一六年の『業種』(甲鳥書林)所収の、『天城』においても、

畑中が水持ちなら、それやもう飲まれてるね(五一七)

無茶だねこれや。(六二〇) 随分これや峻しいですね(二〇一)

みんなの水を飲んで、これやすまんね(二一五)

同じく『終点の上で』においても、

それや、あたしよりあなたの方が(二三〇一)

それやあたしの家から来て変つたのだと(二二六)

それや、やはり気の弱い人なんだよ(二四五)

これや、おれも何とかして長生きしなくちやならん(二二九)

このように、該当する部分は全てエ列仮名表記である。

以上のように見てくると、昭和七年から九年ころにエ列仮名表記使用に傾き、その後も作品によつてはイ列仮名表記のものもあるが、昭和十年代は基本的にはエ列仮名表記になつたと言えそうである。また、複数の本に共通して、「なければ」からの、ナキヤはイ列仮名表記の「なきや」であり、ナケリヤはエ列仮名表記の「なけれや」であるという特徴も見られた。

### 三

葉山嘉樹も、途中からエ列仮名表記を多用するようになった作家であるが、二つの表記の併用も比較的多く、中心的なものがイ列仮名表記からエ列仮名表記になるという変化のようである。

大正一五年の作品集『淫売婦』(春陽堂)の『淫売婦』では、

それや分らねえ(六二)

だがさうしなけれや、あの女は薬も飲めないし(三二)

以上の二つは既にエ列仮名表記となつているが、これ以外は、次のように通常のイ列仮名である。

そりや病院の特等室か、どこかの海岸の別荘の方が(二二三)

そりや金持ちと云ふ奴さ(二九二)

でなけりや……(二五)

そして病院に行かなけりや(二三五)

私が働かなけりや年とつたお母さんも私と一緒に生きては行けな

いんだのに(一六二)

卵を食べさせて男に蹂躪されりや、差引欠損になる(三一七)

知りたきや教へてやつてもい、よ(二九)

なお、元の語の末尾イ列音の場合は当然イ列仮名表記なのであるが、その例も一応示しておく(非拗音の可能性あるものも含む)。

人に話をもちかける時にや、相手が返事を出来るやうな(六一)

楽しむつて訳にや行かねえぜ(二二六)

君の命はありやしないよ(二二)

おめえたちや、皆、こ、と一緒に棲んでゐるのかい(二五)

同じ作品集収録の『山抜け』では、次のようにやはりイ列仮名表記であるが、

そりやあ気がつかかつたが(五四)

家に居りやあ、助かる筈がないんだからね(五五)

でなけりや、もう、今時分慌て、そこら中駈けまはる筈(六一)

1例だけエ列仮名表記がある。

駅の方へでも行つたとすれや、未だ望みがありますがね(六二)

元の語末イ列音の例は当然イ列仮名表記である。

としさの家はありやしなないぢやないか(五八)

同じく収録作『どこも冷たい』では、イ列仮名表記のみである。

そりや、あの連中はいゝ気持ちやあるまいよ (七二二)

長く居るとすりやあ、「奴等」が出て行くだらう (七一三)

三分もすりや息を吹つかへずさ (七四三)

今度はぬからないやうにやらなきやいけない (七六六)

元の語末イ列音の例は次があった。

わたしや、あそこで待つてるよ (八二二)

同『出しやうのない手紙』には、エ列仮名表記も見られる。

それや罰当りだ (一三九九)

さうすれや、何の未練もなく引き上げますからね (一四三一)

しかし右のスリヤはイ列仮名表記もある。

俺が一時間の余も待つとすりや、子供等はもう二時間も待つてる

だらう (一四一十二)

もう四五日待たなきやならない (一三九三)

同『追跡』もイ列仮名表記である。

そりや、君達が勝手に立つてるだけのことだ (一九九三)

汽車に乗つちまひすりやあ、暖かいや (一九二七)

病院でなけりや、お前なんぞが (一九九五)

同『赤い荷札』もイ列仮名表記である。

おとなしくしなけりや、駄目ぢやないか (二二〇二)

も少し取扱を注意して貰はなきや困る (二二六六)

同『住むべき処を求めて』にはエ列仮名表記ナキヤ「なけや」が1例見られる。

でなけや、こんな晩は、若い者だつて遊びに出ない (二三二六)

これ以外はイ列仮名表記である。

そりやもう、俺には分つてるさ (二三一六)

線路伝ひに行きやあ、造作はねえさ (二三三三)

此処さへ、うまく抜け出しや、又、何とかなるだらう (二三四二)

三円がとこも乗りや、一晚は越せるだらう (二三四〇)

同『春の悩み』ではナキヤは通常のイ列仮名である。

「プロレタリア解放運動」が起らなきや、ならなかつたんだ (二

四三七)

同『労働者の居ない船』も全てイ列仮名表記である。

そりや表面うらなのこつた、そんなもんぢやないや (二五九四)

上下から焙りやこそ、あの位に酔つ払へる (二六二四)

酔つ払つてへど吐きや、臭いに極つてら (二七〇九)

二時間や三時間で死んで臭くなりや、酒あ一日で (二七〇九)

ボースン、ボースンと立てときや、いやに親方振りやがつて

(二七〇三)

以上のとおり、作品集『淫売婦』には、イ列仮名表記が多く、少しエ列仮名表記がある(元「それは」及び「仮定形+ば」の例のうち、イ列仮名31例、エ列仮名6例となる)。

同じく大正一五年『海に生くる人々』(改造社)は例は少し挙げるにとどめるが、仮定形+「は」からのものはイ列仮名表記、「それ」+「は」からのソリヤはエ列仮名表記になっている。

倉庫の番さへしてりや、それで沢山だらう (三二)

すくくたばりやもつと傷が軽いわけさ (二三三)

黙つて休みやいいさ (四三二)

鬨はなけりやならん (三五五)

ハツキリ知らなきやならないんだ (三二一)

それやあ君、泥棒猫だからさ (三〇二)

それや僕に限つたこつちやないぜ (五八六)

それやね、誰も払はんとは云はんだが (六五七)

昭和二年の作品集『浚渫船』(春陽堂、文壇新人叢書5)の最初の

『乳色の霧』では、やはり通常のイ列仮名表記が多い。

そりやお前のバスケットかい? (二六一)

そりや俺んだよ (一七二)

そりや又どう云ふ訳でかい? (二二四)

若し捕つてりや偽物だよ (七二〇)

よし、かうなりややくそだ (二五八)

あんなにあそこに集つてる処を見りや、外の処が手薄に (二八四)

近くでやりやあ、あいつらが目屋をつけられらあな (二八五)

それに相当した事をしなけりや損だ! (八七)

罪人共を外に出さなけりや、取締りの法がつかない (一三二)

捕縄をかけられてゐなけりやならないんだのに (二七二)

知つてなきや、そんな無茶苦茶な事が云へる筈は (二七七)

一人でなきや駄目さ (二八九)

右の「なきや」2例とともに次の「なけや」2例もある。

打つ捨らかしとかなけやい、ぢやないか (一七二)

でなけや、一人が一人づつ連れて歩いて仕事出来る訳はないか

らな (二八〇)

なお、イ列仮名+「あ」の例もあった。

おいらあ、一日娑婆に居りあ、お前さんなんか、十年暮して

よりか (五三)

同作品集収録の表題作『浚渫船』はイ列仮名表記のみである。

(俺にや覚悟が出来てるんだ (三三七) 他に「にや」(三七二))

ありや腐つた臍腑だけつか入つてねえんだ (三九七)

それで傷が癒りや、医者なんぞ食ひ上げだ (三五七)

働けなくなりや食へないんだ (四六四)

どん詰りまで行きやあ、俺だつて、虫けらたあ違ふ (三五〇)

昭和三年『新選葉山嘉樹集』(改造社)所収の『誰が殺したか』は、

両表記併用である。

そりやひどいのです (四二二)

よくさへなりや、坊たちに今までより楽をさせてやる (三五上七)

俺は出なけりやならない (二六下八)

それや分つてゐます (四二上七)

何でもかでも俺は生きなけれやならない (二六下九)

昭和四年の改造文庫『労働者の居ない船』収録の『港町の女』では、

次のように両表記が同程度に見られる。

そりや僕だつて(八七七)

考を決めて置かなけりやならない(八一五)

でなけりや、何でもない事にあんなにはしやける訳のものぢやな

いだらう(八七九)

それや全く腹の立つ、癪に障る、恥しい、生意気なこと(九一一)

本船に帰らなけやならないんだからなあ(八八一)

高等海員にでもならなけや、やり切れないほど苦しい(九五五)

なお、「ちや」「ぢや」以外のア列拗音表記用例として以下のものがあり、一応示しておく。

嫌ひでなんか、ありやしないんだよ(八八五)

話になりやしないわ(九六四)

そんなお馬鹿さんにや、私たちの皮だつて見えやしない(九〇四)

ひしやがれ、苛まれて(八三一六)

はしやいでる(八七三)

聞いてらつしやい(九三四)

同じ昭和四年の『稚き闘士』(日本評論社、新作長編選集)では、音融合部分が、次のような片仮名アを用いた表記になっている。少しだけ例を示す。

終ひまでやらなきア駄目だよ(一一二一〇)

家督でなけれア、俺の子にし度え位えだ(一一三四)

女の子でも産むとなれア、男の子も産れない訳はねえからなあ

(一一三五)

これらのうち、「きア」は拗音と見られるが、「れア」のほうは文字通り「lea」の非拗音とも拗音の可能性あるとも見られる<sup>(6)</sup>。

昭和五年『誰が殺したか?』(日本評論社)には、先に示した『新選葉山嘉樹集』所収の『誰が殺したか』の続きも付加した『誰が殺したか?』(書名と目次では?が加わっている)が収録されている。初めの共通部分の表記は、先に示したものと全く同じであるので、ここには付加部分の用例を示す。

それや俺のせいぢやないよ(一二二一三)

これや、どうしたつてんだ(一二二一一)

欲しけれや、何でもかつこみやがれ(一二二六七)

こんな時で、も無けれや、俺たちは大きな洋食屋なんかに入

れねえからな(一一一九三)

通らなけれやい、ぢやないか(一二三四一三)

考へんけれやいかん(一二五九一〇)

俺んとこの地所を歩かなけやい、だらう(一二三五二)

いよく、食へなけやその時のこつた(一二六〇六)

以上のように、専らエ列仮名表記である。但しナキヤには「薬を持つてかなきや駄目ぢやないか(一二六二二)」もあった。なお、元の語末イ列音の場合は次のようにイ列仮名表記である。

しようがありやしない(一二二一二)

肉も稀にや欲しいわい(一一一六四)

そうせにやいかん(一二五五一〇)(一二五六四)

俺たちやスープの材料の上に直かに寝るのかい(一一九六)

このように、この付加部分では、既にエ列仮名表記専用であるが、同じこの『誰が殺したか?』収録の『海底に眠るマドロスの群』では、次のように、「〜れば」からのリヤが通常のイ列仮名で表記されている。

自由の眼を擦つてりや、世話あねえ事あ世話がねえ(一八三13)  
やつてりやい、ぢやねえか(一九三10)

もう三十年も前に船に乗つてりや、いいボースンになれたらうに  
なあ(一九四五)

昭和一〇年の『今日様』(ナウカ社)所収の『山谿に生くる人々―生きる為に―』においても、既にエ列仮名表記が中心になっている。

あんなだけなら、それやいいかも知れないけど(九一1)

それや、俺だつて、どこかで、楽な生活が出来れば(九一4)

こつちだつて、それや一つや二つぢやありません(二〇〇10)

それやあね。掘れば出ない事はないでせうけど(一二九8)

や、これやあ、どうも(一四〇13)

早速困らなげやならんが(九二10)

それさへ忘れなげやいいぢやないの(九三9)

腹を立てなげやならない時には(九六13)

鯉でも活かしておかなげや、活きた魚なんて、外のものは手に入

りません(一三九12)

下の方に足場を作らなげやならなかつたんで(二三三1)

俺一人が、何か人生を探究しなければならん、と云ふ訳はあるま  
い(八三9)

力を入れなげや抜けやしなないぢやないか(八六10)

その飛ばつちりを浴びなげや、ならないんですものね(九三8)

ハツパをかけれや、石が飛ぶのは当り前ぢやないか(二四一2)

但し右のような部分でも、イ列仮名表記が少し見られる。

ありや昔嘶だぜ(一〇四12)

そりやあ、ハツパをかけて石が飛ばないやうぢや(一四一3)

徹底的に防備して貰はなげりや、工事を中止して貰ふ以外にあり

あせんよ(一四〇9)

抜けなきや落ちつこないつので(一三三3)

なお、エ列仮名表記の想定されない部分は、次のように全て通常のイ

列仮名表記である。

光線ぢやないか(八〇3)

あんなの値打が上るつて訳ぢや、あるまいし(九三6)

をかしいじやないか(八六10) 他に「ぢや」は多数あり

あれぢやあ、姑でなくたつて、音を上げちやうね(一〇七7)

そんな利害得失ぢやあ無い(一五二9)

ぢやあよし(八二4)

ぢやあ、いいから好きなやうにして遊びな(八八3)

そんなこと喋舌つちやいられないんだよ(二三一8)

俺達にや分らないんだらうか(一五四5)

世の中の歯車が嵌り込んだ(九二一〇)

流れちやつたんだ(二三一六) 他に「ちやつた」3例

ちやんとした(八二二・三) チヤンと入つてたんだし(八六八)

武ちゃん(八五八) 睦ちゃん(二〇八七)

ウヒヤーツ(一一一三)

昭和一四年『山の幸』(日本文学社)所収の『濁流』も、基本的にはエ列仮名表記になっている。

これや駄目だ(八二八)

おうい、あれやあ飯場の屋根だぞ(一〇六二)

川向うから押さへなければ法がつかねえ(八二九)

雨でも抜ける程降らなければやおめえ(九八四)

食はなけや参つてしまふぢやないか(七八四)

右の「なけや」には、イ列仮名表記も1例見られる。

カフスボタンが無きや、シヤツの袖がダブダブして具合が悪いか

らのう(九二一)

この例は助動詞ではなく形容詞で、かつ漢字表記されている点に関わる(意味がすぐには喚起されない平仮名表記の場合は、元の語形が分かりやすい表記にしたいという意識が、より生じるか)とも考えられるが、1例ずつなので何とも言い難いところではある。なお、イ列仮名表記例を一応示しておく。

真つ黒ぢやないか。その上、虫が半分以上食つてるぢやないか(七五二)

今行つたんぢや、詰まらんぢやないか(九七)

こんな玩具みたいな隧道ぢや、もう俺のする仕事は(九四一)

「ぢや」他に(七八六)(八三四)(九三九)(九三二)(九七七)

(九七七)(九七〇)(九八二)(二〇一八)(二〇一九)

(二〇二八)(二〇七八)

そんな非国民に、腹一杯食はれちや堪らんから(七八四)

アラを見られちや堪らん(八一九)

わし等も手を焼いとるんぢや(八六二)

どうしてあんなに手だけ長く拵へてあるんぢやらう(九二一三)

助かるちうもんぢや(八六三)

これで親方と名がついてゐるんぢや(九九一)

「シヤ」& 聞こえる複雑な音(九三二)

俺たちや非国民ぢやねえぞ(九八六)

これよりやました(八四七)

イ列仮名+「あ」も1例あった。

わたしあとても辛抱が出来ないから。(二〇二二)

以上のように、やはり昭和一〇年頃には基本がエ列仮名表記となつたと見えそうである。また、「なければ」からのナキヤは、横光利一とは異なり、第一節で例を示した佐藤春夫と同じで、エ列仮名表記「なけや」であった。

#### 四

井上友一郎の場合は、初めからエ列仮名表記も見られ両表記併用であったが、それがエ列仮名表記中心になるという変化である。

昭和一四年『波の上』（砂子屋書房）収録作品のうち、『資本』については、「こりや」「これや」両方の表記が見られる点を別稿に少し述べたので、コリヤ以外の用例を示しておく。

わたしなんて、そりや、やはり水物です（八四六）

下手に現ナマを握つとりや、まるでわが身をつぶし食ひにするや

うなもんで（七六九）

続く『餓鬼』を見ると、「これや」がある。

これや先生も強欲だとおつしやる筈だよ（二〇二四）

次の『流れの音』にはイ列仮名表記が見られる。

とにかく一寸来てくれりやい、（一四三12）

『高円寺』には両方の表記がある。

全くそれや大げさね（二〇一五）

それや、これでいけないとは誰も云はないよ（二〇五二）

こりや意味ないな（二〇九七）

『駅』にはエ列仮名表記の例が多い。

僕も一寸出かけなきやならないんで（二三三10）

それや昼間だつて此処は田舎だよ（二四七五）

それや仕方がないがね（二五一八）

それやさうかも知れないけど（二五四九）

それや、一体何の意味だい（二六二四）

おれやお目には掛れねえつて云ふんだ（二六〇八）

そつとお通りになれや、まさか食つて掛りもしますまい（二六五〇）

このように、両表記併用であるが、エ列仮名表記も初めから結構用いていた。

昭和一五年『残夢』（青木書店）所収の表題作『残夢』は、既に以下のようにエ列仮名表記は専用となっている。

判つたと思つてゐても、それや要するに、世間の唯の人間に判る

程度にしか、判らないんですからね（七九）

それや黒田君、一つやつてみたまへ（八二）

それやよかつたな（五三七）

それや、ちゃんと原稿も書き、用事のない時は早く家に帰つて下

すつたら（一四七）

御自分はそれや面白い（一三六）

それや、みつともない（五五二）

それや悪かつた（六六11）

それや踊りたければ行つてもいいがね（二〇一六）

それや春尾、東京にあたいんだけど（一一四三）

それや困るだらう（一一四11）

もつとも、それや責任のある話ぢやない（二二九五）

いや、何でもないので。あれや、さういふ女なんだ（六三三七）

そんなにかしけれや、止したらい、だらう (二三四)

面白けれや、お前もやつたらどうだ (二三八)

行きたけれや行けと云つたぢやないか (八七七)

原稿なんぞも書けなけや、五年でも十年でも書けない (二四八)

図々しいつたらあれやしなわ (二〇八三)

右の最後の例の「ありは」からのアリヤは、他は全て次のようにイ列仮名表記であって、右の例は例外となる。

みつともないつたらありやしなわ (七〇三)

急にそんな手ありやしなわ (七六五)

まったく現金つたらありやしなわ (七六九)

全く野暮と云つたらありやしなわ (八八三)

全く生意気つたらありやしなわ (二一八五)

だらしないつたらありやしなわ (二一八九)

やはり同じリヤでも、「くれ」+「は」「ば」からのリヤはエ列仮名表記、「り」+「は」からのリヤはイ列仮名表記という意識のあったことが分かる。但し、「くれば」からの場合、形容詞・形容詞型活用助動詞は右に示したように「くれや」というエ列仮名表記だが、動詞は次のように「りや」というイ列仮名表記である。

ダンサーでもやつてくれりや、差当り凌いでいくことも (二二二)

明けりやダンサーの涙雨よ (二〇三七)

ナキヤは、「なけや」1例があったが、「なきや」2例も見られた。

一時の約束を三時に来なきやいけないやうな (二八一)

それが信用して頂けなきや、すぐ東京へ帰ります (九五二)

この作品も、イ列仮名表記が想定される部分が、予想どおり全てイ列仮名表記であるということを一応示しておく。

もう日本ぢや踊りなんかやれなくなるぜ (四三)

それは同じことぢやないか (九八)

待たせてみたわけぢやないし、要するに大したことぢやない (二四一三)

駄目よ、この雨ぢや。(二二三九)

同様の「ぢや」他に40例ほど

ぢや高木君の奥さんにはさう云つて断はるからね (一四一三)

ぢや、そのお昼きつかりに、美松のオーケストラ・ボックスの前

の席で (三八一三) 同様の「ぢや」他に8例

ぢやあ止す (五六一三) ぢやあ、何かい (二二四五) 他に4例

——それぢや (六七一一) それぢや一寸踊つてくるわ (八〇一三)

それぢや、これで腹の虫がをさまつたといふわけだね? (六九一一)

——それぢや、うるさいといけないから (七九一九) 他に3例

何でもやつておかなくちや僕も承知できないんだよ (四四)

どうしても社に一寸顔を出さなくちやいけない用が (二六一〇)

社へ出なくちやならなかつたといふ事情を説明した (二七一九)

他に4例 もう、かうなつちやあ、おしまひですよ (七五)

リヤカー頼んで行つちやう (五三三八)

もう約束しちやつたんだもの…… (八四一三)

がっかりしちやつたわ(一〇三13)

あ、腐つちやふわ(一一九6) ちやんと原稿も書き(一四七)

顎ちやんだつて(四二四) 書棚の前にしやがんで(二五五)

そつと連れ出しに來たんどつしやろ(九七一)

踊つてらつしやいよ(七九10)

遠くから見てらつしやい(一一二一)

昭和一八年の『雁の宿』(今日の問題社)も、数は少ないがエ列仮名表記専用である。

それや、船ですな(六3) ほう、それや大変(二九一)

なあに、それや仕事があるよ。(四四4)

僕に云はせれや(三二12)

念のためイ列仮名表記例も示しておく。

何しろ種屋の息子ちや世間の信用が違ふからな(二二11)

本当にそんな佳人があるんちやないのかい?(三〇10)

とにかく今ちや、一頃の出稼ぎ根性といふ奴は余程無くなつたし

(三二9)

何か向うちや軍の難しい仕事をやつていた(三六1) 他に10例

満洲ちやあ、この三月踊り場は閉鎖されたが(三一6)

黙つてゐちや分らないね(三九5)

丹頂鶴にしちや、些か薄汚えが(四六一)

是非お泊りになつてゐらつしやいませんか?(五13)

ちやんと(三二4) 赤ちやん(三九3)

この井上友一郎は、戦後も作品を発表しているので、同じくエ列仮名表記使用者で戦後の作品もある宇野浩一・佐藤春夫・丹羽文雄などと合わせ、どのあたりの時期の本にまでエ列仮名表記が見られるのか、後ほど改めて調査を行うことにしたいと考えている。今回は、最初は必ずしもエ列仮名表記専用ではなかったという点のみを見ておくことにした。

## 五

エ列仮名が用いられる可能性のある部分の表記が、横光利一は、最初の10年ほどは殆ど全てがイ列仮名表記で、両表記併用が少しあつてから、後の10年ほどはほぼエ列仮名表記専用となつたこと、葉山嘉樹は、両表記併用だがイ列仮名表記が中心のだったものが、両方が同程度になり、その後ほエ列仮名表記専用になつたこと、井上友一郎は、(ソリヤ・コリヤであつても)両表記が見られたが、すぐにほぼエ列仮名表記専用になつたこと、以上のような変化が、今回調査した三人の作家の本には見られることが分かつた。微妙に異なるところはあつたものの、最初はエ列仮名表記専用ではなかつたのに、結局ほぼエ列仮名表記になるわけで、昭和戦前期にはエ列仮名表記の広がりという注目すべき表記上の現象があつたことが窺われる。

このエ列仮名表記は、変化する以前の過去の(本来の)形に拠り所を求めるといふ点で、当時は規範とされた歴史的仮名遣いの原理に通じるものがある。一方で、同時代においても、音融合という変化の生

じた形だけでなく、非融合の形も用いられている(「それは面白い」と「そりゃ面白い」が併用される等)から、意味の共通性という点からも、非融合形と融合形が近い表記になったほうが良い<sup>7)</sup>ということもなる。

用例が多くなかったため確かなことは言えないのではあるが、横光利一の、既にエ列仮名表記専用となった時期の作品において、コリヤが基本的にエ列仮名表記の「これや」である中に、イ列仮名表記の例があった理由として、「これは」であるという意識が弱いものの場合ということが考えられた。また横光利一において、「なければ」からのナキヤが、イ列仮名表記「なきや」(葉山嘉樹はエ列仮名表記「なけや」だった)である点については、やはり元の語形との遠さが原因であると考えられる。ナケリヤはエ列仮名表記「なけれや」になっていて、同じ「なければ」からの変化形がイ列仮名表記とエ列仮名表記に分かれてしまっているが、ナケリヤは、元の語形の表記「なければ」と融合形ナケリヤの表記「なけれや」を近いものにできる、対してナキヤには近づきたい「元の語形」が無いということになる。このように、近づきたい本来の形が想定できるかどうかという点が、エ列仮名表記には関わっていると言えそうである。

変化する以前の書き方が本来のものであるという考え方は、歴史的仮名遣いが規範であった昭和戦前期においては正しいものであったと見られるから、ア列拗音エ列仮名表記はある程度まで広がることになったが、その後、本来のものが、変化する以前の形、過去の形とい

うわけではなくなったということからか、このエ列仮名表記は結局は行われなくなってしまう。意味の共通性(現代仮名遣いにおいても、四つ仮名「じ・ぢ・ず・づ」の書き分け等には、この原理が適用されることがあるが)よりも、音の共通性(同じリヤは一つの表記にする)が重視されるようになり、このエ列仮名表記は衰退したと考えられる。

「本来の形」を想定した表記に、ア列拗音表記の一部を変えらう、歴史的仮名遣いの部分的変更が一時期行われていた。意識的か無意識かという点是不明ではあるが、元の形に表記も近づきたいという志向を、最初から有していた人や、途中から持つようになった人が、ある程度存在していたということになる。そのような志向は他の表記部分にも表れるようであり、この時期の表記の実態解明を引き続き行いたいと考えている。

#### 注

- 1 信頼できる本文を調査したものとしては、小松(二〇〇二)、小松(二〇一三)などがある。
- 2 考察は久保田(二〇二四)に示したが、この別稿ではイ列仮名+「あ」やエ列仮名+「あ」「ア」の用例も少し調査した。今回調査を行う三人の作家の作品については、横光利一『紋章』『天使』および井上友一郎『残夢』のエ列仮名表記例を少しだけ示し、葉山嘉樹『還元記』の全該当例を示してある。
- 3 但し、元の語末がエ列音の、「書けば」「嗅げば」「貸せば」「立てば」「死ねば」「飛べば」「読めば」等、動詞仮定形+「ば」からの、キヤ・ギヤ・シャ・チャ・ニヤ・ビヤ・ミヤなどの例は、久保田(二〇二四)の調

査では殆ど見つからなかった。入江・金(二〇二〇)を見ると、この論考で「動詞一般」とする、これらのキャ・ギャ・シヤ等は、非常に多い助動詞「ない」に比べてかなり少ないから、なかなか用例無いは仕方ないと言える。なお、大正・昭和期の小説で見つかった中では、「出せや」(↑出セバ)というエ列仮名表記が黒島伝治の作品に見られたが、「ねば」からのニヤは「くせにや(いかん)」のように複数の作品でイ列仮名表記であった。

4 エ列仮名表記は古くから少なかったと見られ、例えば、石山寺一切経『成唯識論』巻八・寛仁四年(一〇二〇)点には「穀麦(コクメヤク)」の例があるとのこと(肥爪周二氏の教示による)で、時には見られるが、やはりエ列仮名表記は異例のようである。小林(二〇一六)などで考察の行われている和泉流狂言台本の「ぜあ」が助動詞「ぢゃ」の表記であるとすれば、異例の一つと言えるか。また洒落本や人情本にコリヤ・ソリヤの「これや」「それや」等が少し見られるが、多くはないようである。

5 葉山嘉樹『海に生くる人々』(大正一五年、改造社)、横光利一『春は馬車に乗つて』(昭和二年、改造社)は精選名著複製全集近代文学館(ほるぶ)に、佐藤春夫『蝗の大旅行』は名著複製刻日本児童文学館(ほるぶ)に、横光利一『高架線』(昭和五年、新潮社)・『上海』(昭和七年、改造社)・『時計』(昭和九年、創元社)・『菜種』(昭和一六年、甲島書林)、葉山嘉樹『淫売婦』(大正一五年、春陽堂)・『浚渫船』(昭和二年、春陽堂)・『稚き闘士』(昭和四年、日本評論社)は国立国会図書館デジタルコレクションに拠った。その他は以下の単行本を調査した。横光利一『日輪』(大正一三年、春陽堂)・『御身』(大正一三年、金星堂)・『寝園』(昭和七年、中央公論社)・『雅歌』(昭和七年、書物展望社)・『機械』(昭和八年、白水社)・『紋章』(昭和九年、改造社)・『天使』(昭和一〇年、創元社)・『春園』(昭和一三年、創元社)・『旅愁』第一篇(昭和一五年、改造社)・『秘色』(昭和一五年、新声閣)、葉山嘉樹『新選葉山嘉樹集』(昭和三年、改造社)・改造文庫『労働者の居ない船』(昭和四年、改造

社)・『誰が殺したか?』(昭和五年、日本評論社)・『今日様』(昭和一〇年、ナウカ社)・『山の幸』(昭和一四年、日本文学社)・『濁流』(昭和一五年、新潮社)、井上友一郎『波の上』(昭和一四年、砂子屋書房)・『残夢』(昭和一五年、青木書店)・『雁の宿』(昭和一八年、今日の問題社)。

6 これらのイ列仮名+「あ(ア)」とエ列仮名+「あ(ア)」についても久保田(二〇二四)では、注2でも述べたとおり用例がある程度示したが、表す音の確定ができないため詳しい考察は行えなかった。イ列仮名+「あ」は、小松(二〇一三)(二〇一五)は拗音表記の一種として認めており、確かに用例を見ると拗音表記である可能性がかなり高いと思われる。

7 吉野(一九五八)では、「みか+つき」であるから、「みかづき」と書く類のものを「意義の体系性」とするが、「体系性は類推心理に立脚するものである。それで体系性をもったものは単純化され、おぼえやすく、つかいやすい」と述べる。元の語形に近い表記は、「類推心理」に基づいたもので、自然な考え方によるものとも言える。

8 屋名池(二〇〇四)は明治期における歴史的仮名遣いの変質を指摘する。明治以降の歴史的仮名遣い表記の文章中には、種々の異例表記が見られ、当時の実態は、興味深い点が多い。

#### 参考文献

- 入江さやか・金明哲(二〇二〇)「コーパスを用いた仮定形音融合使用に関する計量的研究」(『国立国語研究所論集』18)
- 久保田篤(二〇二四)「大正・昭和期における和語のア列拗音の表記」(近代語学会編『近代語研究 第二十四集』武蔵野書院)
- 小林千草(二〇一六)『成城(甲)本における「ぜあ」——その実態と狂言台本としての性格——』(『東海大学紀要文学部』第一〇四輯)
- 小林千草(二〇一九)『幕末期狂言台本の総合的研究 和泉流台本編1』(清文堂出版)

小松寿雄（二〇〇二）「江戸東京語における女性の係助詞ハと連母音アイの融合」〔『国語と国文学』79巻8号〕

小松寿雄（二〇一三）「吾輩は猫である」における係助詞「は」の融合転化」〔近代語学会編『近代語研究 第十七集』武蔵野書院〕

小松寿雄（二〇一五）「明和の洒落本における係助詞ハの変容——付・浮世風 呂・浮世床との比較——」〔近代語学会編『近代語研究 第十八集』武蔵野書院〕

屋名池誠（二〇〇四）「明治語の表記」〔『日本語学』23巻12号〕

吉野忠（一九五八）「現代かなづかいとその問題点」〔『統日本文法講座2表記編』明治書院〕